

植民地期ペルーにおける 「偶像崇拜・魔術」撲滅巡察史

谷口智子

植民地ペルーにおける「偶像崇拜・魔術」撲滅巡察の歴史は、16世紀から18世紀中頃までの約250年あまりである。しかし、そのもっとも最盛期は17世紀初頭から17世紀中ごろまでの約50年間である。本稿ではその50年間を中心に、巡察の歴史を概観したい。なお、参照した先行研究としてピエール・デュビオルの『アンデスの文化と抑圧』、ケネス・ミルズの『偶像崇拜とその敵』をあげておく¹⁾。

1. 初期の改宗政策

スペイン国王は1501年および1508年の教皇大勅書によって、王室保護権の名のもとに広範な教会指揮権を与えられ、聖職者の叙任や教区の設定などを行う権利を得た。そのため、先住民への布教、改宗は国家レベルの事業となった。これを受けてインディアス枢機会議の決定方針のもと、各修道会は先住民の改宗を押し進めた。

宣教のスタイルは先述したようにおよそ二通りあった。ひとつは大都市中心のローマ・カトリック教会直属の司教支配と教区組織の設立であり、もうひとつは、周辺地域（アンデス高原の谷間や山奥の村々、東部の熱帯低地）における修道会による改宗区（ドクトリーナ）設立²⁾である。

先住民のキリスト教化はカトリック教会と各修道会によって行われた。1532年以降、リマに最初の教区がつくられた。ドミニコ会士トマス・デ・サン・マルティンがリマの北東に修道士を送り、いくつかの学校を開いた。ラス・カサスのインフォーマントであり、ケチュア語辞書編集者であったドミニコ会士ドミンゴ・デ・サント・トマスは、近隣の町や教区において、その優れた説教により多くの先住民を引きつけ、改宗に成功した。

征服直後は教理の教えもなしに集団的強制改宗と弾圧・迫害が行われていたが、必ずしも根本的なキリスト教化が成功したわけではなく、形だけ

のものとなるのが現状であった。先住民の多くは改宗を強制される単なる受動的なクリスチャンではなく、クリスチャンとして振る舞うことにより、伝統的宗教を守るしたたかさを持っていた。先住民の洗礼、結婚式、堅信礼などは形式的に行われたが、それらは見せかけの改宗にすぎず、その実状は野放しになっていた³⁾。

1541年に、クスコの一般教区司祭、ルイス・デ・モラレスは、国王への手紙において、次のように嘆願した。インカ族は太陽、ワカ（先住民の聖なるもの）、先祖のミイラに対する儀礼を行っているが、これを弾圧・迫害する必要が我々にはあるので、このような「偶像崇拜」を摘発できる専門家を必要としていると。これを受けて、大司教ロアイザ（在任1545-1549年）が弾圧・迫害の手順を詳述する指示を出した⁴⁾。そこには後世の偶像崇拜巡察の青写真を見いだすことができる。それは毎年、巡察使に各村を6-8日見廻らせ、先住民のワカを破壊させるというものであった。そして、教会墓地に埋められた改宗インディオのマルキ（遺体）を先祖伝来の墓地に再び埋葬するという先住民の行為を禁止した。

しかしながら、先住民宗教のこのような「偶像崇拜」はスペイン人聖職者の間にさまざまな議論を引き起こした。ドミニコ会士バルトロメ・デ・ラスカサスは、「偶像崇拜」の抑圧は恐れによってではなく、愛によってなされるべきだと主張し、イエズス会士ホセ・デ・アコスタも、信仰の最大の対立物は、力と暴力であり、先住民から強制的に先祖伝来の教えや習慣を奪えば、彼らの心をいっそう頑なにさせるだけであろう⁵⁾と警告した。そこでアコスタはキリスト教の福音が届く前の強制的な偶像崇拜の殲滅は、先住民の心にある福音への扉を開かせるよりも、むしろ、それを閉じてしまうだろう、と警告したのである。

アコスタはアウグスティヌスにならい、何者も力によって無理にクリスチャンにすることはできないと説き、偶像をまずその祭壇からでなく、人々の心から離れさせなければならぬ⁶⁾と説いた。しかし、アコスタの主張はいまだキリスト教についてよく知らない先住民の存在を前提としていた。彼は、改宗インディオが抱える問題を考慮に入れていなかった。しかし、真に重大な問題は改宗インディオの隠された「偶像崇拜」であった。

2. タキ・オンコイと最初の巡察

偶像崇拜撲滅のため、第五代副王フランシスコ・デ・トレドは司教たちと協力して、クリストバル・デ・モリーナ⁷⁾やクリストバル・デ・アルボルノス⁸⁾のような、ケチュア語、アイマラ語に堪能な説教師を巡察使として選び、任命した(1570-1575年)。これは特に、1569-1571年まで行われたタキ・オンコイ⁹⁾に抵抗するためであった。

タキ・オンコイは先住民宗教とキリスト教が創造的に結びつき、終末・破壊と再生・復活を説いたものである。予言者はスペイン統治の終焉とアンデスの神々の勝利・復活を説き、それに追随する人々は歌い踊りながら各地を巡った¹⁰⁾。タキ・オンコイは1572年にクスコで処刑された最後のインカ、トゥパク・アマルーの死と関わる¹¹⁾といわれている。このインカ王の死はスペイン支配とカトリック教会に対する先住民の強い反感を引き起こしたが、それゆえに一層、タキ・オンコイに対する調査は厳しいものになった。我々は、ワマン・ポマ・デ・アヤラの『新しき統治とよき時代』¹²⁾によって、その状況を窺い知ることができる。

1583年に、ペルーのすべてのワカを発見せよというアルボルノスの意見が提示された。これは後年のパブロ・ホセ・デ・アリアーガやペドロ・デ・ビリャゴメスに先行する偶像崇拜弾圧・迫害の最初のモデルである。特にアルボルノスの記録には、聖職者が鎮圧しなくてはならないワカや信仰のタイプが並べられていた。

アルボルノスはタキ・オンコイに見られるような先住民宗教とキリスト教が結びついたコスモロジーや宗教的儀式を「偶像崇拜」とみなし、それを信奉する人々を先住民の完全なスペイン化とキリスト教徒化に反対する「棄教者」とみなして追跡した。そして彼らの処罰に異端審問を適用した。懲罰の内容は、主に①教会の改修、罰金、物資の提供の強制、②先住民共同体からの罪人の長期間の隔離、監禁、矯正、追放¹³⁾であった。これらは17世紀以降の巡察において用いられた懲罰の直接的モデルとなった。

さらに、アルボルノスはワカ¹⁴⁾の発見を助ける者及び告白する者には報償を、隠す者には罰を与えることを提案している。この飴と鞭の政策は、17世紀前半に活躍した巡察使パブロ・ホセ・デ・アリアーガにも引き継がれている¹⁵⁾。

アルボルノスのタキ・オンコイに関する偶像崇拜調査は質的なアプロー

チというよりも量的なもので、後年の調査の仕方に影響を与えた。彼はおよそ8,000人の先住民を「偶像崇拜」の罪で処罰し、彼らに集団改宗を行った。

1570年、1577年、1584年に報告されたアルボルノスの『業務報告 (*Informaciones de servicios*)』には、三年間の巡察の間に偶像崇拜者と見なされた人間、罰された魔術師、破壊されたワカの名前と数が列挙された。弾圧・迫害に必要不可欠な先住民宗教についての詳細な情報は、弾圧・迫害者のハンドブックとなる1583年の『ペルーにおけるワカ発見の手引き (*Instrucción para descubrir todas las guacas del piru y sus camayos y haciendas*)』に書かれている。ここでは最も一般的な先住民の信仰とワカのタイプが列挙され、巡察の対象とされた地域に分けて整理・記述されている。アルボルノスはタワンティン・スーユ (インカ帝国) の主要なワカについても記述した。彼はこれらを破壊し、燃やし、名前と数のみを記録に残した。

アルボルノスの記録によれば、征服後、山間部の奥地ビルカバンバに隠れたインカ (王、貴族、僧侶階級) たちは、改宗した先住民にも説教し、人々に贈り物や約束などをして常に古の宗教を復興させようと試みていたという。彼らは、キリスト教の神に征服されることで忘れられた多くのワカや追放された聖なるインカのもとへ、人々が回帰すべきであるとペルー各地で説教して廻ったという。インカ達はスペインの植民地支配に対抗したインカ王、トゥパク・アマルーの持っていた大いなる名誉、価値、守護力について語り、忘れられていたワカを復興し、ワカの怒りを宥め、征服されたこの世界が変わることを信じていたという。そこで語られたいくつかのワカの名前は非常に有名であり、多くの人々の崇敬を受け、かつてインカによって多くの労働力、土地、家畜などが捧げられていた場所であった¹⁶⁾という。インカの祭儀復興は、中央アンデス高地のビルカバンバから北部のキトまで広まった。ワカの説教師たちは武装しなかったが、先住民に多大な影響力を持った。アルボルノスによれば、ワカの説教師達の行動と説教は、「我々キリスト教徒からすれば醜いものが多く、タキ・オンゴ (タキ・オンコイ) あるいはアイラと称する踊りの形態をとり、単純さと肉の墮落行為に満ちていた」¹⁷⁾という。これら「悪魔の説教師たち」とその集団は、忘れられたワカを発見し、ワカの言葉を語り、多くの供物や犠牲を捧げ、演奏し、飲酒し、「狂ったように」踊り、古の儀式に身を任せたと

いう。そして、道端にある十字架や聖像を壊して歩いたので、アルボルノスらはそれらを修復し、人々を処罰し、注意深く説教した。そして毎年巡察使たちに、破壊されたワカが復興されていないかを監視させたという。ワカの多くは復興されるか、もしくは破壊されていても、その跡には供犠の後の血や、祭儀の後のろうそくの燃えかすなどが見られた¹⁸⁾と書かれている。

また、アルボルノスは多くのミイラを発見し、それらを燃やした。先住民は教会墓地に埋められる先祖の墓を暴き、本来の墓地（主にマチャイと呼ばれる洞窟など）にミイラを戻し、生け贄やチチャを捧げ、崇拜していた。アルボルノスは160のカシーケ¹⁹⁾のミイラとともに、その衣服、奉納品、遺品などを村々で発見し、広場に薪を集め、それらすべてを燃やした²⁰⁾という。

アルボルノスの活動は主にクスコにおける改宗区の一般司祭の力の範囲内のものであり、ワカや先住民宗教に関する記録も萌芽的なものであった。17世紀以降の偶像崇拜巡察はさらに大規模かつ組織的なものになり、それらの記録も体系的なものとなって、質、量ともにアルボルノスのなした行為をはるかに凌駕したが、彼の方法は後年の巡察の基本的方針を決定する重要な役割を果たしたといえる。

3. 副王トレドとリマ異端審問

第五代副王フランシスコ・デ・トレド（在任1569-1581年）は1564年にペルーに赴任した。当時インカ族のリーダー、ティトゥ・クシが指導するタキ・オンコイが、ビルカバンバですでに発生し、アンデス各地に広がっていた。副王トレドは、1570-1575年にかけて巡察を行ったが、先住民の偶像崇拜に対する最も適切な方法は、司法によって懲罰を課すことであると確信していた。副王は、政治と宗教の一致、すなわち、先住民のスペイン化とキリスト教徒化を目論み、そのための体制を整えた。さらに副王は、タキ・オンコイを破壊する指示を国王からとりつけ、植民地ペルーにおけるスペインの支配体制のもとで、先住民の宗教・文化の統合を妨げたという。副王トレドの統治のもとでは、今やアンデスの完全な征服が求められた。そして強制改宗、強制労働、強制集住（集村化）という三つの強制が制度化されたのである。

先住民は偶像崇拜という犯罪を口実に奴隷にされることも少なくなかった。副王トレドの統治時代に民事裁判が偶像崇拜撲滅に介入したのも、こうした背景があったから²¹⁾とみられている。

先住民宗教のルーツを排除するため、インカ時代から知られている先住民の宗教的専門家は「魔術師」として特に攻撃の対象となり、次の処置が第二回リマ管区教会会議で決定された。行政側は逮捕した魔術師を即刻投獄し、釈放のための資金や差し入れなどを他の先住民に依頼させないよう見張ることにした。棄教者、偶像崇拜者は、世俗法廷と教会による異端審問所によって罰せられた。副王は、これらの罪人に死刑を求刑できるように国王に請願したが、これはスペイン国王に拒否された。

副王トレドはキリスト教を理解しない先住民すべてを異端審問にかけることを提唱したが、国王はこれも拒否した。本国にいる国王の先住民宗教に対する寛容政策と、実地をおさめる副王トレドの厳しい考えの間には断絶があった。最終的に国王は1575年、「偶像崇拜告発は世俗法廷によって裁かれるのではなく、教会法廷によって裁かれるべきである」という王令を下し、罪人の死刑を認めず、副王の考えを退けたのである。

4. リマ管区教会会議とイエズス会の活動

第一代リマ大司教ヘロニモ・デ・ロアイサ（在任1541-1575年）によって、第一回リマ管区教会会議（1551-1552年）、第二回リマ管区教会会議（1567年）が召集され、先住民教化のための様々な議論が行われた²²⁾。1551年の第一回リマ管区教会会議は、先祖のマルキ（遺体）を本来葬られていた場所に移して、死者儀礼を行っていた先住民のやり方に注意を促すよう取り決めた²³⁾。伝統的な死者儀礼を行う先住民には鞭打ち、剃髪などの刑罰が与えられた。「偶像崇拜者」と見なされた彼らは、10日間ほど牢屋に入れられた後、カトリック教義の再教育が施された。1567年に行われた第二回リマ管区教会会議では、クラカ²⁴⁾によって煽動される宗教抵抗運動を弾圧・迫害することが主眼とされた²⁵⁾。宗教的抵抗を指揮したクラカやそれに追随した先住民たちに司祭は過ちを諭し、彼らに公証人の前で三日間ワカを非難させたあと、それらを破壊させた。さらに司祭たちは、聖人像に偶像が巧みに隠され、キリスト教の儀礼が異教の儀礼に重ね合わされている²⁶⁾ことに注意を促した。

ここで我々が注目しなければならないのは、「偶像崇拜」巡察に関わるイエズス会士たちのめざましい活躍である。そもそもイエズス会士たちがリマに到着したのは1568年であり、ペルー布教に関して他の修道会よりも遅れをとっていた。しかし、巡察に積極的に関わるようになって以来、先住民の偶像崇拜・魔術弾圧・迫害に最も寄与する集団となった。彼らによって先住民宗教における宗教的専門家は「魔術師」²⁷⁾と呼ばれた。「魔術師」は悪魔の忌まわしき使い、カトリック教徒にとって呪うべきものと見なされた。「真の神の司祭」が一年かけて先住民に福音を施しても、「魔術師」は一日でそれをだめにし、人々の心を虜にする²⁸⁾と揶揄された。彼らは牢屋に隔離され、厳しい刑罰を受けた。「魔術師」の裁判は教会法廷によるものか、世俗法廷によるものか、不明瞭なケースもあった。これは先に述べたように、副王トレド以降の世俗権力による聖権への介入、すなわち、偶像崇拜の調査とその処罰（本来は教会権力の領域である）にその原因を帰すことができる。

1582-1583年には第二代リマ大司教トリビオ・アルフォンソ・デ・モグロベッホ²⁹⁾による第三回リマ管区教会会議が招集された。モグロベッホは偶像崇拜巡察と被疑者の処罰にコレヒドールや世俗法廷が介入することを嫌い、奴隷狩りなどを目的とする被疑者の不当な摘発に歯止めをかけた。彼が主導した第三回リマ管区教会会議では、偶像崇拜・魔術摘発と先住民改宗のためのガイドラインが設けられた。そこでは、先住民の改宗を勧める聖職者や宣教師が彼らの言語を学び、それらを用いて先住民教化の手引き書（公教要理の教え、聴罪、説教）を作成すること、セミナリオをつくり人材を育成すること、副王庁やアウディエンシア、王国など行政に対する教会の司法権を守ることなどが取り決められた。ガイドラインにはさらに被疑者の肉体的刑罰の軽減も盛り込まれた。

その後、スペイン人聖職者達はモグロベッホのもとでガイドラインを組織的に実現するよう関心を注いだ。26年間にわたり、モグロベッホはペルーのローマ・カトリック教会の最高責任者として先住民対策の方針を決定し続けた。

モグロベッホは自身がケチュア語を学び、幾度も巡察の旅に出かけた。その経験によって、先住民が潜在的なクリスチャンであるという彼自身の確信を持つに至った。また彼はキリスト教を受容した先住民の多くがその教えに満足し、さらなる知識を得ようと望んでいると考えた。モグロベッ

ホはこうした経験から、先住民が訓練された聖職者からの教えとその「偶像崇拜」への注意深い監視を受けることによって、よきキリスト教徒になると確信した³⁰⁾。

こうしてモグロベッホの指導のもと、先住民の福音について聖職者の中で真剣に討議されるようになった。ヨーロッパの非キリスト教徒同様、アメリカ大陸の先住民の問題は、17世紀初頭には避けられない重大な宗教的問題として、常に教会人の議論にのぼった。ペルーの教会人は先住民の自発的な改宗を望んだが、多くの人間は(先住民の改宗に関し、予測不可能であるという意味で)、ペルーをキリスト教発展のための理想的な土地とみなすことができなかった。さらに彼らは依然として先住民に受け継がれている「宗教的過ち」を見過ごすことがもはやできなかった。また、先住民への伝道も効果がないように思われた。このようなわけで、大司教モグロベッホの指導に当初賛同していた教会人の中でも、彼の在任期間終了後、次第にその政策を批判する人が増えた。特に教区司祭フランシスコ・デ・アビラやイエズス会士ディエゴ・アルバレス・デ・パス、パブロ・ホセ・デ・アリアーガらは、モグロベッホを信心深い教会人として評価しながらも、先住民の改宗と福音に関する彼の熱意は、その実、先住民によって欺かれていたと批判した³¹⁾。

例えば、イエズス会士アリアーガ³²⁾は、1621年にアンデスにおける「偶像崇拜」の実体と撲滅のための教示書を出版したが、その中で、モグロベッホの寛容な先住民に対する理解、すなわち、「改宗した先住民はすべて善きクリスチャンである」という理解に対する反駁文を提示した。そして先住民が「偶像崇拜」を行っているという事実を万人に証明してみせようと考えた。彼は著書『ペルーにおける偶像崇拜の根絶』の第八章においてモグロベッホを尊敬しながらも、その先住民教化対策は失敗しており、その影響は計り知れないと語っている。それは次の文章から窺える。

今は栄光とともにましますドン・トリビオ様などは、どんな小さな、離れたところにある村でも、洩れなくお巡りになった。それでも当時はなにも見つからず、今分かっていることが分からなかったのだ。それほど(先住民の間に)秘密が固く守られていたのである。³³⁾

モグロベッホの誤った楽天主義や盲目に対する判決は明白である。こ

の偉大な御方はあまりにも大きな希望を持ち、あまりにも数少ない教区司祭の情報を持ち、あまりにも植民地アンデスの宗教性の悪しき現実からかけ離れており、あまりにも早く活動しすぎたのである。³⁴⁾

こうして偶像崇拜撲滅のための巡察運動「偶像崇拜撲滅巡察 (Extirpación de idolatría)」が本格化した。この運動がもっとも盛んになったのは、1610-1660年の間のおよそ50年間である。

5. アビラと偶像崇拜巡察の始まり

きっかけは1608年に始まった。フランシスコ・デ・アビラ³⁵⁾はリマ東部のワロチリ地方サン・ダミアン村の司祭であったが、自身の担当する教区の信徒たちに、「先住民を不当に働かせる悪い説教師」として訴えられた。これを受けて、イエズス会士ディエゴ・アルバレス・デ・パスが、現地を調査させたところ、その訴訟が嘘であることがわかった。アビラを訴えた首謀者の男は、多量の鼻血のため重体になっていたところをアビラに癒してもらい、感激して、自らが行っていた「偶像崇拜」的振る舞いを暴露した。アビラによれば、多くの先住民はキリスト教の装いのもと、「異教」の神々を崇拜していた。その証拠品は発見され、翌年、アビラはリマに赴き、第三代リマ大司教ロボ・ゲレロと副王エスキラツチェ公³⁶⁾を説得して、リマのアルマス広場で「異教徒」の審問を開始した。そして彼らを統括していた「魔術師」エルナンド・パウカルに苔刑を執行した後、パウカルをチリに追放した。アルマス広場で先住民の「偶像崇拜・魔術」に関わる多数の証拠品を焼却した。この事件のため、1610年に、アビラは大司教ロボ・ゲレロにより、「偶像崇拜の巡察使 (Visitador de idolatría)」に任命され、イエズス会の協力で、ワロチリ、ヤウヨス、チャチャポヤスの各地方で異教摘発の旅を開始するよう求められた。以降、約140年間にわたる巡察の歴史は、アビラによる「カトリックの装いをまとった異教」の再発見によって幕が開けられた。

その顛末は次の通りである。1608年8月、クリストバル・チョケカッカという信者が、先住民のある計画をアビラに知らせた。ワロチリの住人が聖母被昇天祭を利用して、パリアカカ (Pariya Qaqa) とチャウピニヤムカ (Chaupi Ñamca) という先住民の神の大祭 (5年ごとに行われる) を計

画しているということであった。そこで祭りの当日の8月15日にアビラは教区民に「悪魔の行い」をやめ、悔い改めるように説教した。驚いた先住民たちがパリアカカに伺いをたてたところ、パリアカカは「アビラを当地から追い出すか、始末しなければ、疫病と飢饉と霜により、すべてを破壊するだろう」という託宣を与えた。住民側はアビラが自分たちに過酷な賦役を強制し、私腹を肥やしたとして告訴したので、リマ大司教ロボ・ゲレロは早速当地へ巡察使を派遣し、その訴状の実態を調査させた。しかし巡察使が到着すると、告訴の当事者である首長クリストバル・リャクサワリンカが大量の鼻血を出して危篤状態に陥り、アビラに対する告訴は偽証だったと告白したので、巡察は突如「偶像崇拜」調査に切り変わった。アビラは彼を調べにきた巡察使と手を組んで、さまざまな「偶像」を発見した。やがて、アビラは当地の人々の崇敬を受けていた「大魔術師」エルナンド・パウカルを捕らえた。最初、パウカルは否認したが、そのうち自ら「偶像崇拜」の罪を認めるに至った。聖霊降誕祭の折、アビラは当地の人々に説教し、パウカルにすべての「偶像崇拜」の罪を告発させた。そして大司教の承認のもと、1609年12月20日、リマ、アルマス広場で異端裁判を行い、先住民が敬うミイラ、「偶像」を彼らの前で破壊、焼却してしまった。さらにパウカルに200回の鞭打ち刑と剃髪を行い、当地に影響を及ぼさせぬよう、チリに追放し、イエズス会の学校でカトリック教義の再教育を受けさせた³⁷⁾。

エルナンド・パウカルはワロチリ地方の先住民宗教の主神チャウピニャモクの祭司の指導者的存在であった。彼はチャウピニャモクとパリアカカ³⁸⁾を祀っていた。サンティアゴ・デ・トゥンマ教会のペンテコステ祭の説教後、パウカルはどのようにして自分がチャウピニャモクの祭司となり、その務めを果たしてきたかを語った。そして、パウカルは自分の語ったことが真実かどうか証明するために、あるインディオを指名し、その者がそれを肯定すると、「それなのにおまえたちは私を告発したのか。神父様、ここにいるインディオは男も女もみんなこのことを知っております。彼らはキリスト教徒ではないし、私もそうではありませんでした。しかし、今はそうなりたいと望んでおります³⁹⁾と告白したという。

アビラはある先住民の女性にパウカルの監禁、監視を頼んだ。この女性には障害を持つ娘が一人いたが、その娘は土地の神マカウイサに妻として仕えることが決まっていた。アビラは「悪魔である悪しき夫の支配から」

娘を解放し、その「偶像」を破壊し、取り上げたが、娘は悲しみ、食事を摂らず、鼻血を出して死んでしまった。彼女の死を看取ったアビラは、集まった先住民に「子供たちよ、悪魔を放棄して神の元に戻りなさい。家に帰って、おまえたちが持っている偶像を捨ててしまいなさい。でなければ、この哀れな娘のように、神の思し召しによっておまえたちも突然死ぬだろう⁴⁰⁾と恫喝した。恐れおののいた先住民はアビラのもとに押しかけ、隠し持っていた「偶像」を提供し、その数は200体を超えた⁴¹⁾という。

6. リマ大司教区と「偶像崇拜・魔術」巡察の体制化

この事件をきっかけに、「偶像崇拜」撲滅巡察が教会によって本格的に組織化された。当初の50年間の間に、リマ大司教に任命されたのは、ロボ・ゲレロ（在任1610-1622年⁴²⁾、ゴンザロ・デ・カンポ（在任1625-1626年）、アリアス・デ・ウガルテ（在任1630-1638年）、ペドロ・デ・ビリャゴメス（在任1641-1671年⁴³⁾である。

特に第三代リマ大司教ロボ・ゲレロはこの体制を推進した。彼はアビラや副王エスキラッチェ公とともに協力し、偶像崇拜巡察を押し進める方針を立てた。リマ大司教館はその先導に立ち、イエズス会がその一翼を担った。カトリック教会はイエズス会の協力の下、リマのプリンシペ学院、サン・マルコス大学や、クスコのサン・ボルハ学院といったキリスト教教育のためのミッション・スクールを作り、これらの学校で教育した人間を各地に送り込み、偶像崇拜が行われているかどうかの調査と説教を行わせた。彼らは「偶像崇拜の巡察使 (Visitador general de las idoratrias)」と呼ばれた。最初の巡察使は1610年に任命されたフランシスコ・デ・アビラ、次に1612年に任命されたディエゴ・ラミレスとエルナンド・デ・アベンダーニョであった。いずれもイエズス会士であった。

偶像崇拜巡察のプロセスは1613年の教会会議で成文化されるにいたった。巡察使は、通常、巡察前の三日間に先住民にワカや魔術師の所在を知らせるよう通達した。間もなく偶像のありかが知らされ、魔術師は告発された。町の教会の祭壇に隠された偶像やワカは破壊され、先祖のミイラも焼かれた。1610年に始まった巡察の歴史は、1619年までの10年間で実に25,000件以上の偶像崇拜調査の報告を生み出した⁴⁴⁾。

ロボ・ゲレロ大司教は偶像崇拜発見と改宗を集中的に促すための教育機

関を組織した。1617年に彼は囚人を教育、矯正させるため、サンタ・クルス館をリマにつくり、そこに囚人を約二年間収監すると決める一方、偶像崇拜の所在を知らせる先住民には奨励金をだすよう、副王領のすべてのコレヒドール⁴⁵⁾に通達した。サンタ・クルス館の建造にはエスキラッチェ公が後ろ盾となり、14,000ペソ以上費やされたという。アリアーガが建造責任を引き受けた⁴⁶⁾。先住民のうち偶像崇拜に荷担し改宗を受け入れない者は、サンタ・クルス館に収監された。大司教の1620年8月30日の指令、副王の同年9月10日の王令により、クラカヤカシーケたちは王令発布後2日以内に自分の村の偶像崇拜を隠し立てしたり、荷担した場合、その職を奪われることとなった。また彼らは頭を剃られ、ミタ(強制労働)に服せしめられ、鞭打たれてサンタ・クルス館に連行された。

アリアーガによれば、ロボ・ゲレロ大司教は、さらに、聖職者が絶えず先住民から目を離さないように次のような規制をつくった⁴⁷⁾。教理に基づき、説教(水曜日と日曜日)を行うこと、それらを印刷すること、印刷物を先住民に読ませること(読まない場合は10ペソの罰金を課すこと)、改宗区のうち先住民が多く住むところではできるだけ長く聖職者を滞在させること、特に逆らう者をサンタ・クルス館に送ること、また、集村化〔レドゥクシオン〕から離れ、行政の秩序に逆らう者を罰すること、ワカ、ミイラを破壊して焼却すること⁴⁸⁾、などであった。

さらに、改宗区担当の聖職者を選別するために、説教及び現地語の試験を行った。それによって身分の低い者でも、説教と言語に長けていれば、昇進可能であるという希望を持たせた⁴⁹⁾。

エスキラッチェ公、アリアーガ、大司教ロボ・ゲレロが相次いで没すると、行き過ぎた偶像崇拜撲滅巡察やそれに関連する多数の汚職⁵⁰⁾が審議されるようになった。大司教の死の翌日、リマの大聖堂支部はすべての偶像崇拜調査をいったん取りやめるよう通達を出した。そして、汚職についての調査を秘かに始めた。その背景にはライバル、イエズス会の活躍を面白く思わなかったドミニコ会の働きかけがあったといわれている⁵¹⁾。

しかし、赴任した新しいリマ大司教ゴンザロ・デ・カンポ(在任1625-1626年)は新しい構想を持っていた。彼はイエズス会士と世俗司祭の組織的教育(巡察使としての)を目指した。イエズス会士は、公証人や世俗判事らの助けを得、巡察のプロセスを確立した。彼らは「偶像崇拜」や「魔術」、「迷信」に関わるとみなした被疑者に自白させ、改悛させ、秘跡を受

けさせた。そして世俗裁判官は彼ら被疑者に判決を下し、処罰を実行した。イエズス会はまた、リマにプリンシペ学院を建て、そこで、クラカ⁵²⁾の子弟たちを教育した。デ・カンポの時代にイエズス会は偶像崇拜撲滅のための新しい機関として再編成された。この大司教は、アリアーガやアビラとともに豊富な巡察経験を持っていた当時のリマ教区司祭エルナンド・デ・アベンダーニョの助けを得た。そしてサンタ・クルス館をリマに建てた。そこで「魔術」、「偶像崇拜」の罪を受けた囚人を収監し、彼らに労働をさせ、キリスト教の再教育を行った。デ・カンポは1626年の12月19日に没したが、彼はロボ・ゲレロ、アビラ、アリアーガらによって確立された偶像崇拜巡察の方法をさらに組織的なものにした。

デ・カンポの後継者であるクレオール⁵³⁾、第五代リマ大司教エルナンド・アリアス・デ・ウガルテ（在任1630-1638年）は先住民宗教（とその弾圧・迫害）にほとんど興味を抱かなかつた。ウガルテ大司教の時代にはリマ大司教館は巡察使について否定的であり、彼らに援助を与えなかつた。ケネス・ミルズは、ウガルテのこの懐疑的態度はスペイン出身の高位聖職者たちによる先住民宗教の弾圧・迫害に対する、現地生まれ（クレオール）としての彼の批判の現れであつたのではないかという興味深い示唆を与えている⁵⁴⁾。

穏健なウガルテの後に大司教に就任した第六代リマ大司教ペドロ・デ・ビリャゴメス（在任1641-1671年）は、巡察の歴史において、もっともめざましい活躍をした。30年に及ぶ彼の在任期間はアンデス先住民にとっての宗教弾圧・迫害がもっとも強く押し進められた時期であつた。彼は「偶像崇拜」、「迷信」、「魔術」の発見と撲滅のために、巡察使向けの二冊のマニュアルを記し、出版した。そのうちの一冊『司教の手紙』（1649年）⁵⁵⁾はアリアーガの本の大部分を複製したもので、その後の巡察の方法を大きく規定した。ビリャゴメスは違反者への刑罰をさらに厳しく残虐なものに規定する（手足を紐に括りつけて車裂きの形を行うなどの細かい指示を出す）一方、巡察を数多くこなすよう巡察使を奨励した。ビリャゴメスは巡察使を多数育成し、各地に送り出した。彼が1649年9月に最初に送り出した7人の巡察使は、第三代大司教ロボ・ゲレロの時代にも活躍したベテランの巡察使、エルナンド・デ・アベンダーニョ⁵⁶⁾とアロンソ・オソリオを含めたメンバー⁵⁷⁾によって構成された。

しかしながら、この巡察は当時の教会人からほとんど評価されなかつ

た⁵⁸⁾。その理由は、①先住民宗教の弾圧・迫害に対する教会内の反対意見、②巡察使の活動資金の不足、③巡察使自身の準備不足などの他に、④王命によって禁止されている先住民の財産の強制的没収を、各地で巡察使が不当に行っていたため（巡察活動の資金不足を理由にして）、であった。つまり、巡察使制度は当時の教会人にとっても目に余る腐敗ぶりを呈していたのである。ピリャゴメスはその批判を次のように主張することでかわそうとした。それは①巡察の効果が教会内であまり理解されていないこと、②巡察使が中央の管理（大司教館）から目の届かない地方で活動しており、彼らを管理するのが非常に難しいこと⁵⁹⁾などである。

さて、教会内で批判されたこの巡察制度は、どのように先住民宗教を迫害・弾圧し、影響を及ぼしたのだろうか。また、先住民からどのような宗教的応答を引き出したのであろうか。我々はそのやりとりを今日リマ大司教区古文書館に眠る膨大な巡察史料から読み解くことができる。本稿はその準備段階としての巡察の歴史についての研究ノートである。

注

- 1) Pierre Duviols, *Cultura andina y represión: Procesos y visitas de idolatrias y hechicerías Cajatambo, siglo XVII*, Cusco, Centro de estudios rurales andinos, "bartolomé de las casas", 1986. Kenneth Mills, *Idolatry and Its Enemies: Colonial Andean Religion and Extirpation, 1640-1750*, New Jersey, Princeton University Press, 1997.
- 2) 教会や修道会は、先住民にとって、非常に重い負担になった。教会は10分の1税を徴取し、そのほかにも多くの物質的要求や、ミタによる労働提供を行った。17世紀はじめ、ワロチリ地方で巡察使フランシスコ・デ・アビラが土着宗教の残存を発見した後に偶像崇拜撲滅巡察が始まると、巡察を中心として教会側の監視はますます厳しくなった。改宗区の司祭は、住民に体罰を与え、取り締まりを行う権利を持っていた。体罰は苔刑がほとんどであったが、頑固な「偶像崇拜者」は、リマのサンタ・クルス館に収監され、矯正のために教育された。サンタ・クルス館は先住民に非常に恐れられた。17世紀の先住民、ワマン・ポマ・デ・アヤラによれば、改宗区の司祭は、住民に生活物資を貢がせ、教会での行事やミサ、祭りのためにたくさんのお金や物、労働力を提供させたという。さらに、司祭が先住民の女性を妾として子供をつくるケースも多かったという。Kenneth Mills and William B. Taylor, eds., "Felipe Guaman Poma de Ayala's Appeal Concerning the Priests, Peru", in:

Colonial Spanish America: A Documentary History, Kenneth Mills and William B. Taylor eds., Wilmington, Scholarly Resources Inc., 1998, pp. 153-164.

- 3) 形式的な改宗は、1560年以降に政治と宗教が結びつき、ペルーにおけるキリスト教国家の設立が王権によって明確に提示されるようになるまで続いた。
- 4) Duviols, *Cultura andina y represión*, p. xxviii.
- 5) ホセ・デ・アコスタ著、青木康征訳『世界布教をめざして』、岩波書店、1992年、43-47頁。
- 6) アコスタ、前掲書、70-71頁。
- 7) クリストバル・デ・モリーナ神父はケチュア語に精通し、クスコのカテドラルやヌエストラ・セニョーラ・デ・ロス・レメディオス教区教会の司祭を務めた。『インカの神話と儀礼 (*Fábulas y mitos de los incas*)』の作者。1585年にクスコで没した。
- 8) 「クスコの聖歌隊長」とアリアーガは説明しているが(パブロ・ホセ・デ・アリアーガ、「ペルーにおける偶像崇拜の根絶」、ペドロ・ピサロ他著、増田義郎他訳、『ペルー王国史』、大航海時代叢書第2期第16巻、岩波書店、1984年、319、330頁)、アルボルノスはクスコの聖職者でタキ・オンコイの巡察使。
- 9) 1560年代に中央—南アンデスに起こった宗教的リバイバル運動。スペイン人とキリスト教の支配が終わると予言するワカ(聖なるもの)のメッセージをワカに憑依された人々が儀礼的踊りや歌の中で受け取り、それを広めた。
- 10) タキはケチュア語で「踊り歌う」の意。
- 11) Christóbal de Arboz, “Instrucción para descubrir todas las guacas del piru y sus camayos y haziendas”, in: *Fábulas y mitos de los incas*, Henrique Urbano y Pierre Duviols eds., Madrid, Historia 16, 1989, pp. 192-198.
- 12) Felipe Guaman Poma de Ayala, *Nueva Corónica y Buen Gobierno (c. 1613)*, Vols. I-III, México, Fondo de Cultura Económica, 1993.
- 13) 公の場で恥を与え、嘲笑すること、例えば鞭打ち、剃髪、半裸でリヤマの背に乗せて通りを歩かせるなどといった懲罰も含まれた。
- 14) 先住民にとっての「聖なるもの」の意。
- 15) パブロ・ホセ・デ・アリアーガ、「ペルーにおける偶像崇拜の根絶」、ペドロ・ピサロ他著、増田義郎他訳、『ペルー王国史』(大航海時代叢書第2期第16巻)、岩波書店、1984年 523-526頁。
- 16) Arboz, “Instrucción”, pp. 192-198.
- 17) *Ibid.*, pp. 192-198.
- 18) *Ibid.*, pp. 192-198.
- 19) スペイン語で「先住民の首長」の意。

- 20) Arborno, "Instrucción", pp. 192-198.
- 21) Duviols, *Cultura andina y represión*, p. xxxi.
- 22) ことに第二回リマ管区会議では、植民地における教会の組織とあり方を決めるいくつかの重要な決定の他に、異端審問所の設置の国王への請願が決議された。こうして1569年にふたりの異端審問官が派遣され、1570年にリマ市に異端審問所が設置された。
- 23) 副王カニエテ侯は偶像崇拜を取り締まるため、長期保存が可能と思われるリマのサン・アンドレス病院に大量のミイラを移した(1556-1560年)。Duviols, *Cultura andina y represión*, p. 123.
- 24) 先住民の共同体の長。スペイン語でカシーケとも呼ばれる。
- 25) 第一回リマ管区教会会議によって、先住民は、洗礼、告解、結婚の秘蹟にしかあずかることができず、聖体拝領を特別の許可がない限り受けとることができないととり決められた。さらに、1567年の第二回リマ管区教会会議の決定により、先住民やメスティーソ(白人と先住民の混血児)の叙階は禁じられ、聖器保管係か侍祭以上の地位につくことを許されなかった。
- 26) 例えば Corpus Christi の行列の聖人像などが隠れた「偶像崇拜」の温床と見なされた。
- 27) 法律家ポロ・デ・オンデガルドは、「魔術師」について詳しく記録を残している。ポロ・デ・オンデガルドは、クスコとポトシのコレヒドール(地方長官)であった。彼は当時のスペイン支配下植民地ペルーの社会経済的状況の分析を行うとともに、先住民から聞き書きした伝統の記録者であった。ポロ・デ・オンデガルドの『学士ポロによるインディオの誤りと迷信についての論理と究明("Los errores y supersticiones de los indios sacadas del tratado y averiguación que hizo el licenciado Polo)』、『インディオの権利を遵守できなかった結果生じた顕著な損害についての根拠の言及("Relación de los fundamentos acerca del notable daño que resulta de no guardar a los indios sus fueros)』(1571年)は植民地時代初期における先住民宗教に関する知識とその迫害についての有名な記録である。

ポロ・デ・オンデガルドは、インカの聖職者たちを先住民の「魔術」とキリスト教とを混交する「魔術師」の集団として描いている。ポロ・デ・オンデガルドによれば、「カマスカ」、「ゾンコヨック」と呼ばれる魔術師は、イニシエーションを司る聖職者としてインカ時代から存続したという。「キリスト教の洗礼を受けた後も、魔術師たちは数多くの秘密に満ちた魔術的迷信とともに、その魔術師としての仕事を(巡察使に)見張られた。彼らの多くは夜誰も見ない場所で治療を行ったからである。」ポロ・デ・オンデガルドはまた、ある魔術師が「丸砥石、歯、さまざまなものに魔法をかけられた羊の像、髪、爪、生きたヒキガエルと死んだヒキガエル、様々な色模様の貝殻、

動物、小動物の乾燥した頭、根、草でいっぱい鉢、軟膏、大きな蜘蛛、泥にまみれた馬の鼻など」を扱ったと記述している。また、魔術師は悪魔と契約し、変身したり、未来の出来事を予言できると記述している。人々の将来の幸福を予知する魔術師は各地に数多くいるが、その方法は地方ごとに異なる。彼らは「蛇、トウモロコシの実、陶器の破片、唾を使ったり、手相を見たりする」と記述されている。

ポロ・デ・オンデガルドはさらに次のように記述している。「スペイン人、インディオ双方の村を訪ね、キリスト教と混交した魔術を行う者もいる。彼らは病人の床に来ると、病人を祝福する。神よ、イエスよ、と呼びかけ、他の善い言葉を使い、病人に神へ祈らせ、手を病人の体に置き、立つかしゃがむか座るかして、唇を震わせ、目を宙に向け、聖なる言葉を語り、罪を告白するように助言し、他のキリスト教の所作を行い、涙を流し、多くの優しい言葉をかけ、十字を切る。また、治療を行うための神や神父や使徒たちの力を自らは保持していると言う。一方で、これらのことを終えると、クイヤコカや獣脂や他のものを使って、供犠や他の祭儀を行う。そして病人の体の腹や足やその他の部位を揉み、痛む部分を吸って、血や虫や小石を取り出して見せ、病気はもう去ってしまったと言うのである」。Juan Polo de Ondegaldo, “Los errores y supersticiones de los indios sacadas del tratado y averiguación que hizo el licenciado Polo”, in: *Colección de libros y documentos (CLD)*, Vol. 3, Lima, 1916, p. 29.

ポロ・デ・オンデガルドの先住民宗教に対する態度は厳しいものであった。ポロ・デ・オンデガルドは、先住民宗教を、インカや聖職者たちの持つ（祭政一致型の宗教・政治・経済など先住民の生活全体に及ぼす）力、スペインの支配に対抗する先住民勢力の温床と捉えたからである。

28) アリアーガ、前掲書、457-458頁。

29) 第二代リマ大司教（1533-1606年、在任1581-1606年）。アルフォンソ10世の子孫の貴族の出で、グラナダの異端審問官をつとめた後、1581-1606年までリマ大司教をつとめた。1582年、1591年、1601年に三回管区教会会議を開いた。

30) Mills, *Idolatry and Its Enemies*, p. 23.

31) *Ibid.*, p. 24.

32) アリアーガは、フランシスコ・デ・アビラのワロチリ地方における「偶像崇拜」の発見という業績を讃え、自身もイエズス会士エルナンド・デ・アベンダーニョ、ディエゴ・ラミレスなどと同様に、17世紀初頭の偶像崇拜撲滅巡察使として活躍した。

33) アリアーガ、前掲書、466頁。

34) Mills, *op. cit.*, p. 24.

- 35) フランシスコ・デ・アビラ (1573-1647年) 自身の語りによれば、彼は身分の高いスペイン人と先住民女性との間の混血児としてクスコに生まれたが、貨幣検査官クリストバル・ロドリゲスの家の入り口に捨てられ、その家で育てられたという。アビラは1592年リマに出て、サン・マルコス大学で学んだ。1596-1608年までリマ東部の山地ワロチリ地方サン・ダミアン教区に司祭として赴任し、「偶像崇拜」を発見、撲滅するための運動を組織化した。1600年頃アビラは博士号を取得した。1606年ペルー中部ワヌコの聖職禄を与えられ、1618年に現ボリビア共和国スクレ市(当時ラ・プラタ副王領)のカテドラル聖堂参事会員、のち、リマの大聖堂参事会員に任ぜられ、1632年にリマに戻った(アリアーガ、前掲書、381頁を参照のこと)。
- 36) この時代の第十一代副王エスキラッチェ公も、同年大司教と同様の趣旨を通達した。エスキラッチェ公フランシスコ・デ・ボルハ・イ・アラゴンは、イエズス会総長聖フランシスコ・デ・ボルハの孫であり、宗教問題に熱心で、大司教と協力し運動を推進した。スペイン本国のインディアス枢機会議に運動の承認と援助を求め、人員や予算の強化を計ったという。アリアーガ、前掲書、367頁。
- 37) アリアーガ、前掲書、384-385頁。Francisco de Ávila, "Prefación libro de los sermones, o homilies. en la lengua castellana y la índica general quechua", in: *Informaciones acerca de la religión y gobierno de los incas*, Urteaga y Romero eds., CLDRHP, serie 1, tomo 1, 1918, pp. 59-98. Pierre Duviols, *La lutte contre les religions autochtones dans le Pérou Colonial l'extirpation de l'idolâtrie 1532 et 1660*, Lima, Institute Français d'Études Andines, 1971, pp. 148-154.
- 38) パリアカカの神話についてはアビラが編纂した『インディオの祖先(ルナ・インディオ・ニスカプ・マチョンクナ)』に詳細に描かれている。かつてワロチリ地方を支配していたのは火の神ワリヤル・カルウィンチュを祀っていたユンカ族であったが、これに対抗したのがパリアカカを祀るヤウヨ族であった。パリアカカはグントウル・クトウルの峰に五つの卵の形で出現し、そこから五羽の鷹が生まれ、やがて五人の人間に変身した。彼らは冒険の後、ワリヤル・カルウィンチュと対決することになった。パリアカカはこの火の神に対し、雨や洪水、稲妻をもって対決し、勝利し、以降、ユンカ族は低地部へ追放されるか、ヤウヨ族と同様パリアカカを受け入れ、神として崇拝するようになったという。George L. Urioste, *Hijos de Pariya Qaqa: La tradición oral de Waru Chiri: mitología, ritual, y costumbres*, Syracuse, Maxwell School of Citizenship and Public Affairs, 1983, Vol. 1, pp. 51-75. 齊藤晃、『魂の征服——アンデスにおける改宗の政治学——』、平凡社、1993年、156-157頁。
- 39) 齊藤、前掲書、241頁。Duviols, *La lutte*, pp. 180-181. Ávila, "Prefación", p. 69.
- 40) 齊藤、前掲書、242頁。Duviols, *ibid.*, pp. 181-182. Ávila, *ibid.*, p. 71.

- 41) 齊藤、前掲書、242頁。Duviols, *ibid.*, pp. 181-182. Ávila, *ibid.*, p. 71.
- 42) ロボ・ゲレロはレコンキスタ以後イスラム教国からキリスト教国になったスペイン南部のアンダルシア地方ロンダで育ち、オスナ大学とサラマンカ大学、セビリヤのコレヒオ・デ・サンタ・マリア・デ・ヘススで学び、教会法で博士号を取った。その後、スペインの異端審問官として活躍し、1583年にはメキシコの異端審問官にもなった。その後、コロンビアのサンタ・フェ・デ・ボゴダの大司教（在任1596-1607年）、第三代リマ大司教として先住民宗教の取り締まりに活躍した。Mills, *Idolatry and Its Enemies*, p. 27.
- 43) ビリャゴメスは、1589年スペインの北部レオン地方ザモラ、カストロベルデ・デ・カンポスで、数々の聖職者を輩出してきたスペインの名家に生まれた。第二代リマ大司教モグロベッホは彼の母方の祖母の兄弟にあたる。彼はサラマンカ大学で神学と法学を修め、1624年にセビリヤ大学で教会法の博士号を取得した。サンタ・マリア・デ・ヘスス大学の巡察使、セビリヤとカディスの異端審問官など歴任した。1632年5月にリマの王立裁判所で国王の巡察使となり、1641年以降約三十年間第六代リマ大司教として偶像崇拜撲滅巡察を主導した。Ibid., pp. 137-148.
- 44) アリアーガ、前掲書、367頁。
- 45) コレヒドールとは、スペイン人官僚を指す。
- 46) アリアーガ、前掲書、501頁。
- 47) アリアーガ、前掲書、496-497頁。
- 48) アリアーガ、前掲書、495-496頁。
- 49) アリアーガ、前掲書、496-497頁。しかし、先住民のカトリック教徒には昇進は限られていた。
- 50) アリアーガは偶像崇拜取り締まりをめぐる汚職に関するある在俗司祭の手紙を紹介している。「とくにポトシ地区内においていちじるしい病であり、この忌まわしい疫病が猖獗をきわめております。その原因はといえば、司直が求めるものはひたすら自己の利益であり、聖職者は謝礼金のみを求めて、悪事を耳にしてもそれをとがめたり止めたりしないことにあります。」アリアーガ、前掲書、472頁。
- 51) Mills, *Idolatry and Its Enemies*, p. 36.
- 52) 先住民の頭領。
- 53) 「クレオール」（クリオーリョ）は、新大陸生まれの白人、黒人、混血を表す。その語義は「新しく生まれること、創造」である。
- 54) Mills, *Idolatry and Its Enemies*, p. 38.
- 55) Pedro de Villagómez, *Carta pastral de exortación e instrucción acerca de las idolatrías de los indios del arzobispado de Lima* (1649), CLDRHP, Vol. 12, Horacio H. Urtega ed., Lima, Imprenta y Librería San Martín, 1919.

- 56) エルナンド・デ・アベンダーニョ (1577-1655年) はリマに生まれ、フランシスコ・アビラとともに、各地を巡察し、1617-1623年には「偶像崇拜に関する総巡察使」をつとめた。1620年にサン・マルコス大学学長、1655年にチリのサンティアゴ司教に任ぜられたが、赴任前に没した。
- 57) 他、フランシスコ・ガマラ、パブロ・レシオ・デ・カスティーリャ、フェリペ・デ・メディーナ、アロンソ・コルバチョ、バルトロメ・フラードなどによって構成された。
- 58) Mills, *Idolatry and Its Enemies*, pp. 146-147.
- 59) *Ibid.*, pp. 147-148.